巻頭言

東京駅丸の内駅舎保存・復原プロジェクトの成功が示す建物の力

2012年10月1日に保存・復原なった東京駅丸の内駅舎がオープンして以来、すでに2年近くを経ているが、いまだに、丸の内駅舎の前やドームの下では建物を写真に撮ろうとカメラを構えている人が絶えない。これほど赤煉瓦の東京駅の再生は人を惹きつける力を持っていたのである。

東京駅丸の内駅舎の再生がこれだけの人を惹きつけているのには、もちろん理由がある。それは、東京駅丸の内駅舎が誰もがよく知っている日本を代表する建築物のひとつであるだけでなく、その再生が高い水準でなされ、文字通り建物に新しい命を吹き込んでくれたからである。

そのことを本書は、余すところなく伝えてくれている。

本書は、東京駅丸の内駅舎の保存・復原プロジェクトがどのような考えのもとで構想され、具体的にどのような手法で実施されたかを、客観的に、建築専門家向けに公にしたものである。この背後には、東日本旅客鉄道による『重要文化財東京駅丸の内駅舎保存・復原工事報告書』(2013年7月)という700頁を超す学術的な記録がある。

本プロジェクトの最大の特色は、保存と復原の基本方針がヴェニス憲章(1964年)などの国際的な基準に則っており、意匠・材料・技法を正確に保存・再現しているのみならず、再現にあたっては推測を排除し、同時に現代的な貢献を明らかにしている点、さらには後世の質の高い補修などにも目を配り、すべての時代の正当な貢献に配慮している点にある。

同時に、今後も長期間にわたって使い続けられることを前提にすべてが設計され、歴史的建造物を守ることと新しい機能を盛り込んで活用し続けることを、新しいデザインも入れながら提案し、日本の高い施工技術で見事に実現している点にある。

その成果は、建物の真実性(オーセンティシティ)の面においても、建物の全体性(インテグリティ)の面においても、国際的に誇りうる水準の保存・復原を達成していることにあらわれている。

とりわけ、これらの高い水準の仕事を、新幹線を含めると毎日50万人近い人が利用する、世界で最も乗降客数が多い駅のひとつである日本の中央駅において、駅機能を1日たりとも停止することなく、免震の重要文化財と非免震の在来駅のハイブリッドという非常に難易度の高い工事のなかで実現していることは、高い賞賛に値する。

これほど高い水準の保存・復原が実現されているからこそ、多くの人々がこの建物に感動し、引き寄せられてくるのである。こうした難工事を構想し、見事に完遂させた関係者の方々に深い敬意を払いたい。

ここに、日本の誇るべきひとつの文化があるといってもいい。

2014年5月

日本イコモス国内委員会委員長・東京大学教授
西村幸夫